

インド論理学研究 第VII号
平成27年11月30日 発行 拠刷

Nyāyakalikā 著者問題再考

片岡 啓

Nyāyakalikā 著者問題再考*

片岡 啓

1. 序

本稿で取り上げるのは、小品『ニヤーヤ・カリカー』の著者問題である。ここで著者問題とは、『ニヤーヤ・マンジャリー』や『アーガマ・ダンバラ』の著者として知られるジャヤンタが、はたして『ニヤーヤ・カリカー』の著者かどうかという問題である。筆者の見解は簡潔である。著者自身が最終詩節においてジャヤンタが著者であることを明確に宣言しているのだから、ジャヤンタが著者であることは常識的に明らかであるというものである。しかし研究史を見ると話は単純ではない。Marui 2000:94 は、結部(1-4行目)を、ジャーのエディションから引用する。

ity etad + + + +

*śodaśapadārthatattvam bālavyutpattaye/
ajātarasaniṣyandam anabhivyaktasaurabham/
nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdrśat//*

(It is not clear what the series of the symbols ‘+’ stands for.)

後に Dezsö 2004 が指摘するように、2行目末の kathitam が Marui 2000 の引用では抜け落ちている。ここで Marui 2004 は、3-4行目のシュローカを決定的な証拠として採用することはない。シュローカを引用した後、肝心の4行目には何も触れることなく直ちに彼は Gupta 1963 の議論の検討に移り、*Syādvādaratnākara* に引用される平行句の検討に入っている。そして、グプタの議論が決定的でないことを指摘した後¹、現在の状況では決定的な結論を導くことは難しいと結論する²。そして結論において、『ニヤーヤ・カリカー』の著者に関して最終的な結論を導くのに十分な証拠を我々はいまだ手にしていないしながらも、ジャヤンタが三つのニヤーヤ著作 (*Nyāyamañjari*, *Nyāyapallava*, *Nyāyakalikā*) をものした可能性は高いとする。原文は次の通りである。

* 助言を受けた Somdev Vasudeva に感謝する。

¹ Marui 2000:997: “But his arguments for Jayanta’s authorship of *NKali* are far from conclusive. They invite new questions instead.”

² Marui 2000:97: “Can we now give a definite answer to our question? In the present circumstances that may be difficult, but I think it is possible for us to take a further step by preparing a foundation for a future decision.”

Marui 2000:100: Although we do not yet have sufficient evidence to form a final decision about the authorship of *NKali*, we may safely conclude for the time being as follows. There is a good probability that Jayanta wrote the *NKali* as one of his trilogy of Nyāya system. The author of *SyādVR* knew the trilogy from which he freely quoted.

このように、Marui 2000 は、結部については何のコメントも残していない。1行目の欠落 (Marui 2000 にとっては不明部) が悪印象を残したのであろうか。次のような思考過程は一つの可能性として考えられる。すなわち、この欠落 (不明部) によりテクストの信頼性が下がったため、この部分を根拠に著者問題を論じることは、慎重かつ確実な議論構成のためには回避したほうが安全である、と。つまり、この欠落部以降について、はたして、著作自体に帰属するジャヤンタのオリジナルの文章なのか、あるいは、写本に帰属するコロフォン (奥書) なのか、自信が持てない状態にあったということが考えられる。このことは、著者問題を論じるにあたって大きな損失をもたらす。というのも、4行目には、『ニヤーヤ・カリカー』という論理の蓄をジャヤンタが示したということが、*nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdrśat* という表現で簡裁かつ明瞭に記されているからである。つまり、『ニヤーヤ・カリカー』の校訂状態が必ずしも十分なものではなかったため、文献証拠を有効に活用できなかつた可能性があるのである。確かに、このジャーの校訂本のみを手にした場合、このシユローカがはたしてジャヤンタ自身のものなのか、あるいは、写本の書写生によるものなのか判断を下すのに躊躇を覚えることは筆者も分からぬではない。ただし、ジャーの校訂本序 (Introduction) を見ると、 “The following pages embody the text of a Nyāya work, called *Nyāyakalikā*, attributed to Jayanta, the author of *Nyāyamañjarī*, ...”とあり、ジャーがこの結部をもってジャヤンタを著者と同定していたことがうかがえる。このことは同じ序において彼がアーリヤー詩節後半部の *bālavyutpattaye* という表現に言及していることからも十分に推測できる。つまりジャーにとっては、そもそも著者がジャヤンタであること、そして、そのジャヤンタがあの有名な『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者であることは疑問にはなっていなかつたのである。本稿では、この結部を中心に著者問題を再考する。

2. 結部のテクストの確定

著者問題に直接に関わる結部のテクスト問題については、前稿で、筆者自身の解決方法

を示した³。前稿において筆者は、ジャ一校訂本の 1-4 行目にあたる結部の二詩節を次のように確定した。

ity etad aprabhāvitani jadarśanam akṛtāparamatākṣepam/
śoḍāśapadārthatattvam bālavyutpattaye kathitam// (āryā)
ajātarasaniṣyandam anabhvīyaktasaurabham/
nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdrśat// (anuṣṭubh)

3. シュローカを捉える視角

以下では、最新の研究である丸井 2014 の問題点を指摘し、筆者との相違点を明確にしたい。丸井 2014:60 は、次のように結部を引用し、若干のコメントをしているが、肝心の「ジャヤンタが示した」という部分には言及しない。

NKali(B), p. 27.17–20:

ity etad +++++ śoḍāśapadārthatattvam bālavyutpattaye kathitam |
ajātarasaniṣyandam anabhvīyaktasaurabham |
nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīdrśat ||*79

以上、+++++ 初学者の習得のために、[ニヤーヤの学体系の骨子をなす]
十六項目の本質が述べられた。

液汁がいまだ流れ落ちることなく、芳しさあらわに漂うこともない、ニ
ヤーヤ [という大樹] の芽にすぎない部分を、ジャヤンタが説明した。

文字どおり、「初学者のために最重要なニヤーヤの定説を要約した」*80 小作品で
ある。版本全体で 27 頁弱にすぎない。

そして、脚注 79 において次のように述べる。

⁷⁹ 記号 “++” は版本の元となった写本に脱落があったことを示していると思われる。た
だし版本にはその記号説明はなく、そもそも使用写本についての説明が全くない。また
“śoḍāśa°” で始まる行が詩節の 1 行であるかのような改行を行っているが、これが脱落部分
に続く散文部分であることが、筆者の参照した諸写本から明らかになることは、第 4 章第
1 節 2.3 で詳述する。実際には “ajāta°” で始まる行と次行が 1 詩節をなしている。

ここで丸井 2014 は、ジャ一による改行に異を唱える。そして、ジャ一の 1-2 行を 1 行
に改めて引用し、散文であることを強調する。しかし、前稿で論じたように、この部分は
アーリヤー詩節の後半部であり、ジャ一の改行が正しい。「実際には……1 詩節をなして

³ 片岡 (forthcoming).

いる」というコメントからすると、最後のシュローカ詩節のアヌシュトウブ韻律ばかりに目が行って、アーリヤーの韻律に気がつかなかったのであろう。さて、肝心のシュローカ後半の記述であるが、それについて、丸井 2014:65 は Jayanta という名称を議論する文脈で言及する。

⁹⁵ J. V. Bhattacharya [1977: 394]: “We cannot advance proof positive to establish the identity of its author Jayanta and Jayanta Bhaṭṭa.” Bhattacharya は NM の著者を “Jayanta Bhaṭṭa”、NKali の著者を “Jayanta” と呼んで区別しているが、特にそのように区別する根拠を示しているわけではない。なお NM と NKali は共に作品の末尾で、著者自ら自分の名前が “Jayanta” であることを明らかにしている。

NM II, p. 718.5–6: vādeśv āptajayoⁱ jayanta iti yaḥ khyātas satām agrāṇīḥ anvartho
navavṛttikāra iti yaṁ śāṁṣanti nāmnā budhāḥ |
ⁱ āptajayo NM(K) ātajayo NM II

NKali(B), p. 27.19–20:

ajātarasaniṣyandam anabhiphyaktasaurabhām |
nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadīrśat ||

筆者に言わせれば、これこそまさに『ニヤーヤ・カリカ』が『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者ジャヤンタと同一である証拠に他ならない。丸井 2014 がコメントするように、ここでは「著者自ら自分の名前が “Jayanta” であることを明らかにしている」のである。これ以上に明白な証拠はない。しかも、自らの名前を刻印する習慣が『ニヤーヤ・マンジャリー』にも確認されるのであるから、『ニヤーヤ・カリカ』の最終詩節を後代の挿入と疑う特段の根拠は存在しない。ジャヤンタ自身がこの詩節を著したと考えるのが最も自然である。にもかかわらず丸井 2014 は、この両最終詩節を著作の証拠として採用することはない。では、丸井 2014 は著者問題（彼は「真贋問題」と呼ぶ）に関して、この詩節をどのように評価していたのであろうか。それは、丸井 2014:91 以下の「3.3 Nyāyakalikā のマンガラ詩節と最終詩節」で議論される。

他方、NKali の最終詩節には、著者問題を考えるうえで興味深い表現上の特徴が見られる。最終詩節は以下のようにであった。

NKali(B), p. 27.19–20:

ajātarasaniṣyandam anabhivyaktasaurabham |
nyāyasya kalikāmātram jayantah paryadidṛśat ||

液汁がいまだ流れ落ちることなく、芳しさあらわに漂うこともない、ニヤーヤ〔という大樹〕の芽にすぎない部分を、ジャヤンタが説明した。

ここには、植物表現を好み、ニヤーヤ哲学の体系全体を大樹にたとえるジャヤンタの筆致を思い起こせるものがある。Raghavan [1964] には彼の比喩表現に言及しているところがあるが、きわめて示唆的な叙述である。

丸井 2014 はここでも「ジャヤンタが示した」という部分には言及することなく、「ニヤーヤの木」という比喩の検討（すなわち「表現上の特徴」）に直ちに入っている。なぜ、丸井 2014 は「ジャヤンタが示した」という箇所を証拠として採用しないのであろうか。

3.1. 丸井 2014 の想定する反論

既に見たように、丸井 2014 は「Bhattacharya がまとめた真贋問題に関するメモ」について次のように記すとともに、括弧内にコメントを加えている（丸井 2014:65-66）。

A. 偽作説（著者別人説）を支持する論拠

①NKali の著者は“Jayanta”である。この“Jayanta”が NM の著者ジャヤンタと同一であることを積極的に証明するような証拠を示すことはできない。（*特に理由は示さないが、このように Bhattacharya は両書の著者の名称を区別している。）（*いずれにせよ）NKali は NM の概要 (synopsis) ではない。（*なぜ概要ではないと言えるのか、その論拠は示していない。）

ここからうかがえるように、Bhattacharya 1977 は、『ニヤーヤ・カリカー』の著者がジャヤンタと称す人物であることを前提とした上で——そしてそれは当然ジャーのエディションの結部を参照しての上であろう——、そのジャヤンタなる人物が、『ニヤーヤ・マンジャリー』のあのジャヤンタ・バッタと同一人物であるかどうかを疑問視する視座を提供する。ここで Bhattacharya の想定は、『ニヤーヤ・カリカー』の著者がジャヤンタと称す人物であることに疑問を挟んではいない。彼が立てる想定は、同定に疑問を呈している。すなわち「同一であることを積極的に証明するような証拠を示すことはできない」と

考えている⁴.

<i>Nyāyakalikā</i>		<i>Nyāyamañjarī</i>
Jayanta	=?=	Jayanta Bhaṭṭa

いっぽう丸井 2014 の議論は微妙に異なる。彼は、「ニヤーヤの木」という比喩について、『ニヤーヤ・マンジャリー』冒頭部の詩節を引用した後、次のように述べている。

前述の NKali の最終詩節と読み合わせたとき、同一人物の手になるものではないかとの印象を受けるのは、筆者一人であろうか。またもし仮にこの NKali の詩節が、NKali をジャヤンタの作品であるかのように装うために別人が創作したものであるとするならば、入念な作為が働いたと評すべきであろう。(丸井 2014:94)

丸井 2014 の第 1 章第 3 節「*Nyāyakalikā* は真作か、偽作か?」の論考の中で「ジャヤンタが示した」という部分を著者問題に関連して直接に評価するのは、実は、この箇所だけである⁵。彼はここで『ニヤーヤ・カリカー』偽作の可能性を想定している。これは Bhattacharya の想定とは異なる。すなわち、丸井 2014 が考える可能性とは、このシュローカ自体がジャヤンタならざる人物の創作であり、あの有名な『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者ジャヤンタに帰するために、すなわち木の比喩まで織り交ぜながら「ジャヤンタの作品であるかのように装うために別人が創作したもの」なのである。

3.2. 偽作説・贋作問題という問題設定

ここで気になっていたことが表面化することになる。すなわち「偽作説」や「真贋問題」という丸井 2014 による問題設定の仕方である。実は、丸井以前においてこのような問題設定自体がなされていなかったのである。まず、問題設定の違いを明確にするため、次の

⁴ 筆者に言わせれば、カシミールのニヤーヤ学者にもう一人の Jayanta が知られていない以上、Jayanta という名前が同一であることから常識的に同一性が導かれる。そして、同一であることを積極的に否定する証拠がない以上、それ以上に、同一性の根拠を積極的に示す必要はないはずである。

⁵ 「*Nyāyamañjarī* と *Nyāyakalikā* の対応関係」を論じる丸井 2014 の第 4 章第 1 節において、丸井は欠落箇所のある終結部について議論する（「2.3 終結部」）が、「ジャヤンタが示した」という言明については、シュローカを引用・和訳するのみでコメントすることはない。そこで議論は欠落部の異読検討に当てられている。

三つの説を区別する。

1. 同名別人説 : Jayanta I とは異なる Jayanta II が著した著作
2. 後代編集説 : Jayanta の *Nyāyamañjarī* の文章を後代抜粋編集したもの
3. 偽作説 : Jayanta に擬して別人が作った贋物

3.2.1. 同名別人説

まず、1は次のように言い換えられる。

I'. このジャヤンタはあのジャヤンタと同一であるか疑わしい

この疑問は Bhattacharya 1977 が提示したものである。たまたま同一名だったという立場である。この立場で重要なのは、『ニヤーヤ・カリカー』の著者が Jayanta と称す人物であることは疑われていないということである。つまり、あの有名な Jayanta I と、このマイナーな Jayanta II とを区別する立場ということになる。このような場合、我々は『ニヤーヤ・カリカー』を偽作とは呼ばない。また贋物と呼ぶこともない。単に我々が同一名から同一人物と誤って判断してしまっただけのことである。つまり、この場合の問題は「真贋問題」ではなく「同定問題」ということになる。つまり、「真作か偽作か」や「真贋問題」という問題設定は適切ではない。実際、Bhattacharya 1977:394 の文章においては identity が問題とされている。したがって丸井 2014:33 による次の発言は不適切である。

丸井 2014:33: なお Potter [1977]には NKali の内容要旨の代わりに、その真贋問題に関して Janakivallabha Bhattacharya がまとめたメモ (J. V. Bhattacharya [1977] = Potter [1977: 394-395]) が含まれているが……

Bhattacharya 1977 の議論は『ニヤーヤ・カリカー』の真贋を問題としているのではなく二人の Jayanta の同定を問題としているのである。また丸井 2014 は次のように Potter による Bhattacharya の議論の紹介部分を紹介している。

丸井 2014:64: しかし Potter [1977:394-395]ではその後、NKali の作品紹介の箇所で、NKali の真贋問題に関するかなり詳しい記述が掲載されている。……

……このような状況のもとでは、要約を提示するよりも、むしろここではカル

カッタ大学の Janakivallabha Bhattacharya が本巻のために書いてくれた小論を掲げて、NKali の真作説・偽作説それぞれの根拠と氏が考える論点を紹介する……

ここで丸井 2014 が「偽作説」と訳した語を含むはずの Potter 1977 の原文は次の通りである。

Potter 1977:394: ... in which he considers the evidence for and against Jayanta's authorship of the work.

Potter 1977 には、どこにも「偽作説」という語はない。あるのは、「ジャヤンタが作者であることに反する証拠」という語だけである。つまり、「あのジャヤンタの作品ではない」ということしか言ってない。それが丸井 2014 においては「偽作説」と変換されてしまっているのである。再度確認するが、Bhattacharya 1977 も Potter 1977 も、『ニヤーヤ・カリカー』がジャヤンタを擬した何者かによる偽作・贋作だとはどこにも言っていないのである。

3.2.2. 後代編集説

次の 2 は、Steinkellner 1961 の見解であり、Gupta 1963 が取り上げたところの問題である。ここでも丸井 2014 は、原文から内容を勝手に変換してしまっている。

丸井 2014:30: NKali がジャヤンタの作品ではなく後代の編纂であるとする、Steinkellner [1961]が提示した偽作説に疑問を投げかけ……

丸井自身が示しているように、Steinkellner 1961 が言っているのは「後代の編纂である」ということである。それが丸井によれば「偽作説」ということになり替わっている。同じことは次の記述からも確認できる。

丸井 2014:61: Steinkellner [1961]は、「出版されている *Nyāyakalikā* はジャヤンタの作品ではなく、ジャヤンタの文章を後代編集したもの」と述べる。しかしそれは Steinkellner 自らの主張ではなく、しかもその主張は「マドラスの V. Raghavan の申し立てによる」と注記されているのみであり、なぜそのように主張しうるのかの根拠も示されていない。しかしその Raghavan が NKali 偽作説を表明しているような論文は見当たらず、

Raghavan [1964]は明らかに、NKali がジャヤンタの著作であるという前提に立って議論を進めている。したがって、「Raghavan の申し立てによる」とされる偽作説は、全く宙に浮いたかたちになってしまう。

NKali の真贋問題を議論の対象として最初に取り上げたのは Gupta [1963]である。……すなわち、NKali には NM と表現上ないし意味上、対応・一致する文章が数多く含まれているから、NKali はジャヤンタ自身の著作ではなく後代の編纂であると考えなければならない、というのが偽作説の根拠であると Gupta [1963]は理解している。

いかがであろうか。Steinkellner 1961 も Gupta 1963 も真贋問題や偽作説を議論していたわけではない。そのことは、「後代編集」「後代の編纂」という丸井 2014 の引用からも明らかである。しかし、それが丸井自身の議論の中では「NKali 偽作説」や「NKali の真贋問題」へと変換されてしまっているのである。しかし、言うまでもないが、「後代の編纂」と「偽作」とは意味を異にする。

3.2.3. 偽作説

丸井 2014 における以上の自動変換を念頭に置くとき、上で見た丸井 2014:94 の仮定が決して単なる一つの仮定ではなく、ある必然性をもって問われたことを我々はよく理解できるようになる。

またもし仮にこの NKali の詩節が、NKali をジャヤンタの作品であるかのように装うために別人が創作したものであるとするならば、入念な作為が働いたと評すべきであろう。(丸井 2014:94)

最終的にジャヤンタ真作説をとる丸井 2014 が念頭に置く最も強力な想定反論は、実は、1 でも 2 でもない、3 なのである。つまり、Jayanta II というたまたま同名の別人物が著したニヤーヤの小品だという可能性や、また、後代の誰かが『ニヤーヤ・マンジャリー』の文章をつなぎ合わせて編纂し直した要約だという可能性ではなく、ジャヤンタの名を騙った誰かが、ジャヤンタの著作として『ニヤーヤ・カリカー』を著したという想定反論を第一に念頭に置いているのである。例えば丸井 2014 の第 1 章第 3 節のタイトルは「*Nyāyakalikā* は真作か、偽作か?」となっている。

しかし、このような反論を完全に斥けるのは難しい。なぜならば、このような想定は、時代考証のための手がかりが少ない小品の場合、ほぼ反証不可能な想定だからである。巧

妙に作られた贋作を結果のみから見破る手立てはほぼない。大作と同じモチーフで、同じサインの入った小さなスケッチが出身地から見つかった場合、普通、それが偽作であると考えたりはしない。小さいスケッチを贋作とする金銭的動機は薄いからである。にもかかわらず、その贋作説を考える人がいる場合、その人を説得することは難しい。モチーフやスタイルの共通性をいくらもってきても、贋作を疑う人にとっては決定打とならないからである。なるとすれば、その時代にはなかつたはずの画材や技法がスケッチに用いられているなどの時代考証が考えられる。しかし既に述べたように、ニヤーヤの一般的な学説をまとめただけの小品に、そのような決定的な手がかりを期待するのは無理である。両著者の同一名を証拠として採用せず、むしろ偽作説の証左とさえ捉える反論者であればなおさらである。そのような疑い深い人を説得する材料は簡単には得られない。したがって、丸井 2014 の次の結論は、ある種、予想された通りのものである。

以上、主として外形上の基準から NKali の真贋問題に迫った。決定的な証拠・論拠を得たとは必ずしもいえないが、おおむね真作説に傾斜した分析結果となった。

しかし同時に新たな問題が浮上した。いみじくも Dezsö [2004] が指摘したように、NKali の唯一の版本である NKali(B) には看過しえないテキスト上の問題点が存在する。特に NM との表現上の対比を行う場合、テキスト上の問題は致命的にもなりうる。冒頭のマンガラ詩節の問題がまさにそのような事例であることは、すでに見たとおりである。本節 2.1 で提示した終結部の欠落箇所も、あるいは重大なメッセージがそこに隠されている可能性がある。

また外形上の比較だけではなく、概念内容や思想内容にまで立ち入って検証しなければ、両書の関係は充分に見えてこない。NKali の真贋問題に対して、J. V. Bhattacharya [1977] は両書の内容の対応関係にまで踏み込もうとはしているものの、論旨が曖昧であったり、実証的な論拠が欠如したりしており、むしろ問題を混乱させている感がある。彼がメモ書きで残した幾つもの論点に対しては、改めて綿密な検討を加えなければならない。(丸井 2014:95)

筆者に言わせれば、外形・内容の相似をいくら調べても、贋作説を疑う人に対して決定的な証拠を示すことは不可能である。

4. 著者問題の解決方法

先行研究における微妙なかみ合わせの悪さはさておき、『ニヤーヤ・カリカー』の著者

問題は、どのように解決すべきなのだろうか。まず動かせない証拠として次を挙げることができる。

- A. カシミールのシャーラダー文字写本で伝わる *Nyāyakalikā* の著者は、「Jayanta が示した」ということを（コロフォンではなく本文の）結部で明らかにしている。つまり、自称 Jayanta なる人物がこのニヤーヤ学綱要書の著者であることを自ら宣言している。

この点については既に写本から確認した。このシュローカは本文に属するものである。また、丸井 2014 が気にしていた欠落部についての問題は解決した。「重大なメッセージがそこに隠されている可能性」は著者問題に関してはないとする。それ以外で丸井 2014 が見逃していた重大なメッセージがあるとすれば、欠落を含む部分がアーリヤー詩節であるということである。次に平行現象として次の点が重要である。

- B. *Nyāyamañjarī* の著者も、著作の（コロフォンではなく本文の）結部において Jayanta（そして Candra の息子にして「新註釈者」としても有名だった人）が著者であることを自ら明記している⁶。

⁶ NM(M) II 718.5–8:

vādeśv *āttajayo **jayanta** iti yaḥ khyātah satām agraṇīr
 anvartho navavṛttikāra iti yaṁ śāṁsanti nāmnā budhāḥḥ/
 sūnur vyāptadigantarasya yaśasā candrasya candraṭviṣā
 cakre candra*kalāvatamṣacaraṇadhyāyī sa dhanyāṁ kṛtim// (śārdūlavikrīḍita)
 *ātta-] M; āpta- V -kalāvatamṣa-] emend.; -kalārdhacūḍa- M; -kalāvacūla- V

「数々の討論において勝利 (jaya) を収め (ātta)，文字通り Jayanta として有名な者，〔良俗を守る〕良き者達の先導者，「新注釈者」という名前でもって賢者達が称賛するところの者，月光という〔白き〕誉れで四方を満たしたチャンドラ (月) の息子，三日月を冠とする [シヴァ] の足を念想する彼が吉祥なる作品を作った。」

読みに関しては、candrakalāvatamṣa から candrakalācūḍa や candrārdhacūḍa という読みが生まれ、そこから、candrakalārdhacūḍa という韻律に合わせた読みが出現したと考えた。candrakalāvacūla という読みは、avatamṣa と cūḍa の二つを混合した結果でてきたものであろう。なおジャヤンタの詩の表現としては Bharṭṛhari の *Śṛṅgāraśataka* 64 を参照したことが考えられる。

そして現在の研究状況として次のことが挙げられる.

C. カシミールのニヤーヤの学匠で他に Jayanta なる人物がいたことは確実な証拠をもっては知られていない⁷.

筆者にとっては、これで十分である。ここから常識的に「*Nyāyakalikā* の著者である Jayanta は、*Nyāyamañjarī* の著者である Jayanta と同一人物である」という結論が導かれるはずである。この ABC 以外の別の論拠から両著作の著者の同一性をさらに論証する必要は認められない。例えば九大文学部に「インド哲学史・片岡先生」という年賀状が送られてきた場合、事務は、内容も見ずに私の所にこの年賀状を回してくれるであろう。それが常識的な判断というものである。あるいは慎重な事務ならば、いちおう裏面の記載内容（しかし年賀状なので極めて簡潔である）をチェックするであろう。その場合の点検作業とは、「同じ人とは考えられない」とする証拠を潰す作業である。つまり、ノイズを取り除く作業である。

D. 著者を別人とする積極的な証拠は見つからない。

ここで想定されている反論は、別人だとする立場である。つまり「この Jayanta II は、(*Nyāyamañjarī* の著者として)有名なあの Jayanta I とは異なる」という主張である。当然、この別人説は、ABC の結論を覆す積極的な根拠を問われることになる。しかし、実際には、Jayanta II を立てる特段の根拠をこの反論者は持たない。根拠としては内容の相違を挙げることになるだろう。つまり、「Jayanta II は Jayanta I ではありえない。学説が違うから」という主張が考えられる。しかし Bhattacharya 1977 が挙げた論点については、既に丸井

kim kandarpa karam kadarthayasi re kodanqatañkāritam
re re kokila komalañ kalaravañ kim vā vṛthā jalpasi/
mugdhe snigdhavidagdhacārumadurair lolaih kañkṣair alañ
cetaś cumbitacandraçūḍacaraṇadhyānāṁṛtañ vartate//

上村 1998:92 は第 4 パーダを「わが心は今、シヴァ神の御足を念想して 甘露を味わっているのだ」と訳出する。

⁷ なお *Gautamīyasūtrapakāśa* に Jayanta の名前が見られることについては、丸井 2014:113, n.193 を参照。

2014:66, 400–415 がいちいち潰している。では、同一とする積極的な証拠についてはどうか。

E. 著者が同一だとする積極的な証拠がある。

しかし、両著作の内容や文章の相似点をいくら挙げても、ABC よりも有力な独立した同一性の証拠になるとは思えない⁸。例えは『ニヤーヤ・カリカ』には、『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者のジャヤンタの説として特徴的と考えられている「全ての聖典は正しい認識の手段である」(sarvāgamaprāmānya) という説が明記されている。そしてここから「特徴的な同一学説を保持する二人は同一人物だ」という主張が導かれるかもしれない。しかしこれも、「ジャヤンタと称する二人は同一人物だ」という ABC から導かれる結論を補強こそそれ、決して独立かつより強力に同一説を導くわけではない。或る学説 P の保持者 X と、それと同一の学説 P の保持者 Y について、X と Y とが同一であるかどうかは、同一名の場合と同様に疑いうるからである。

$$\text{学説 P の保持者 X} \quad =?=? \quad \text{学説 P の保持者 Y}$$

しかも、同一名よりも同一学説保持は同一性を確証する証拠能力は低い。同一学説よりも同一名のほうがより特徴的で独自のものだからである。

あるいは、ジャヤンタより後の学匠が、ジャヤンタのあずかり知らぬ所でジャヤンタの文章を勝手に編纂したと仮定しよう。言なれば『ニヤーヤ・マンジャリーの枢要』(*Nyāyamañjarīśāra) とでも呼ぶべき教科書を後代の人が編纂したという想定である。しかしその仮定は「論理のほんの薔（ニヤーヤ・カリカ）だけをジャヤンタが示した」という結語に反する。この言明は、『ニヤーヤ・カリカ』の著者がジャヤンタであることを宣言しているからである。したがって「Jayanta が Nyāyamañjari において示したニヤーヤ学の枢要だけを [某著者 X が] まとめた」という含意は持ち得ない。

この難点を回避するために偽作説を取ってみよう。『ニヤーヤ・カリカ』全体が、『ニヤーヤ・マンジャリー』の著者であるジャヤンタの作として意図をもって偽作されたとい

⁸丸井 2014:62: 「この中で（1）は真作か偽作かの決定基準、方法論の問題であるが、多数の平行句の存在自体は真作か偽作かのいずれか一方に結論づける決定打とはなりえないことも事実である。また（2）は「多数の平行句の存在→偽作」という偽作説の論法に対する反証を示すことを意図したものであり、そのかぎりにおいては正しい議論であるが、だからといって「多数の平行句の存在→真作」という論法を支持することにはならない。」

う想定である。この場合、コロフォンではなく作品それ自体に属している結部のシュローカは、「NKali をジャヤンタの作品であるかのように装うために別人が創作したもの」であり「入念な作為が働いたと評すべき」ことになる。

これはまさに「真贋問題」という問題設定に当てはまる想定反論である。丸井 2014 は、あくまでも想定反論としてこのような疑問を提示しているが、彼が「真贋問題」として問題を設定したとき、すでに、このような仮定を深く内にはらんでいたのである。『ニヤーヤ・カリカー』はあの有名なジャヤンタに帰せられた偽作・贋作であるというのが「真贋問題」という問題の設定視座である。つまり『ニヤーヤ・カリカー』はジャヤンタならざる人物があのジャヤンタを装った贋作の可能性があるというのである。その場合、その動機が問題となる。しかしながら、初代シャンカラのような宗教指導者や、あるいは、有力な王に著作を帰属させる場合と違い、ニヤーヤの一学匠に過ぎないジャヤンタに著作を帰するメリットはない。後代の編纂であれば、それをわざわざジャヤンタ作と擬する意味はないのである。

また、入念な偽作を疑う場合、その可能性はどのようにしても消えることはない。なぜならば、ジャヤンタの名前・内容・文体まで、そっくりの贋作を作ったと想定するならば、その嘘を見破ることは、内容の比較検討からは不可能となるからである。真作説が証拠として提示する『ニヤーヤ・マンジャリー』との相似点については「贋作者がそっくり真似ただのだ」と言えば良いことになる。つまり、贋作を考える場合、いくら内容の比較検討をしても、真作説を立てる全ての議論は無力となってしまう。可能とすれば、後代の学匠が *Nyāyamañjarī* の Jayanta の著作として *Nyāyakalikā* を挙げているという議論となる。つまり、「*Nyāyamañjarī* の作者である Jayanta は、*Nyāyakalikā*において次のように述べている」などの文句があればよい。しかし、そのような便利な証拠は丸井 2014 が詳細に論じるヴァーディデーヴアスリーの *Syādvādaratnākara* の中にも見つからない。そこには、両著作からの平行句が見られるが、両著作の著者を同一とする言明は見つかないのである。丸井 2014 は次のように記している。

しかしそりより慎重に議論を進めるなら、以上の考察から確実に言えることは、ヴァーディデーヴアが NM と NKalil を同一の著者による作品である、すなわち NM の著者ジャヤンタが NKali も著した、と受け止めていた可能性が非常に高い、というところまでであり、NKali がジャヤンタの真作であることを確実に保証するような論拠にまで達しているとは言い切れないことも事実である。（丸井 2014:90）

また、後代の学匠もまんまとだまされていたという可能性をも賛成論者は反論として提示できる。つまり、賛成説は、反論することが恐らく不可能な議論なのである。言い換えれば、それは、常識的に考えて立ててはならない反論なのである。

筆者から見ると、ボタンの掛け違いは、A を第一の証拠として重視しないことから始まったように思われる⁹。そしてそれは、ジャーのエディションにあった欠落部が残した悪印象の結果ではないかと愚考する。慎重であるのは結構だが、我々は、人々の常識を越えて疑いすぎてはならない。同定の証拠としては ABC で十分であり、あとは、ノイズを除去する作業 D が残るだけである。E は ABC から導かれる結論を補強するが、単独で証拠となるものではない。「ジャヤンタが示した」とわざわざ自作であることを末尾のシュローカで明言したにもかかわらず、自作かどうかをここまで疑われるとはジャヤンタも夢想だにしなかつたであろう。

5. 結論

1. 「Nyāyakalikā は Jayanta の真作か偽作か」については、丸井以前の先行研究では問題になっていたなかった。また常識的に考えて、そのような問い合わせるべきではない過剰な想定である。つまり「真贋問題」という問題設定は常識を越えて不必要に疑いすぎである。
2. Bhattacharya の問い合わせを整理すると「Nyāyakalikā の著者である Jayanta は、Nyāyamañjari の著者である Jayanta と同一かどうか」という同定問題となる。
3. 常識的には ABC の証拠から同一性が導かれる。特に、A を第一の証拠として取り上げるべきである。A の証拠能力を高めるための浄化作業（結部のテキスト確定作業）を前稿では行った。
4. もし必要であれば、D をもって、非同一説を封じればよい。その作業は丸井 2014 によって行われている。
5. 同一性に関して E は ABC 以上の独立証拠となることはない。
6. 証拠 E は、真贋問題に関しては証拠能力を欠くので、決定打となることは理論上ありえない。
7. Nyāyakalikā を後代の編纂とする根拠薄弱な想定は、はるかに確実な根拠 ABC から導かれる結論と矛盾するので考慮する必要はない。特に本文末尾のシュローカにおける「論

⁹ 丸井 2014:453–454 は「NKali が真作であろうという結論」に関して、多くの論拠ないし検証を最後にまとめているが、その中で「ジャヤンタが示した」という言明は取り上げられていない。

理の蓄（ニヤーヤ・カリカ）をジャヤンタが示した」という言明は、ジャヤンタなる人物が『ニヤーヤ・カリカ』の著者であることを明示しており、後代編纂説を斥けるものである。

略号表および参照文献

Āgamaḍambara

- ĀD *Much Ado About Religion by Bhaṭṭa Jayanta.* Ed. Csaba Dezső. New York University Press and the JJC Foundation, 2005.

Nyāyakalikā

- NK *The Nyāyakalikā of Jayanta.* Ed. Ganganath Jha. Princess of Wales Sarasvati Bhavana Texts, No. 17. Benares, 1925.

Nyāyamañjarī (=NM)

- M *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa with Tippaṇī — Nyāyasaurabha by the Editor.* Ed. K.S. Varadācārya. 2 vols. Mysore: Oriental Research Institute, 1969, 1983.

- V *The Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa.* 2 parts. Ed. Gaṅgādhara Śāstrī Tailaṅga. Vizianagaram Sanskrit Series, No. 10. Benares: E.J. Lazarus & Co., 1895, 1896.

Vādanyāya

- VN *Dharmakirtis Vādanyāya.* Teil I. Ed. M.T. MUCH. Wien, 1991.

Vākyapadīya

- VP *Bhartrhari's Vākyapadīya.* Ed. Wilhelm Rau. Wiesbaden: Komissionsverlag Franz Steiner GMBH, 1977.

Śrṅgāraśataka

- ŚŚ *The epigrams attributed to Bhartrihari.* Ed. D.D. Kosambi. Bombay, 1948.

Syādvādaratnākara

- SVR *Śrīmadvādidevasūririviracitah Pramāṇayatattvālokālankārah Tadvyākhyā ca Syādvādaratnākaraḥ.* 2 parts. Delhi: Bharatiya Vidya Prakashan, 1988.

Bhattacharya, Janaki Vallabha

- 1977 “Nyāyakalikā” in Potter 1977.

Dezső, Csaba

- 2004 An extra Introduction to *Much Ado About Religion by Bhatta Jayanta*, New York University Press JJC Foundation. Download from www.claysanskritlibrary.org/excerpts/CSLMuchAdolIntro.pdf.zip. (A part of PhD

diss. submitted to Oxford University in 2004.)

Gupta, Brahmananda

- 1963 *Die Wahrnehmungslehre in der Nyāyamañjarī*. Walldorf: Verlag für Orientkunde Dr. H. Vorndran.

Kamimura, Katsuhiko (上村 勝彦)

- 1998 『インド詩集 夢幻の愛』, 東京 : 春秋社.

Kataoka, Kei (片岡 啓)

- 2003 “Critical Edition of the *Vijñānādvaitavāda* Section of Bhaṭṭa Jayanta's *Nyāyamañjarī*.” 『東洋文化研究所紀要』144, 318(115)–278(155).

- 2013 “A Critical Edition of Bhaṭṭa Jayanta's *Nyāyakalikā* (Part 1).” 『東洋文化研究所紀要』163, 236(1)–184(53).

forthcoming 「*Nyāyakalikā* 結語再考」『インド論理学研究』9号 (掲載予定).

Marui, Hiroshi (丸井 浩)

- 1996 「Jayanta Bhaṭṭa の著作をめぐる諸問題」『印度哲学仏教学』11:1-20.

- 2000 “Some Remarks on Jayanta's Writings: Is *Nyāyakalikā* his Authentic Work?” In: *The Way to Liberation. Indological Studies in Japan*, ed. Sengaku Mayeda, Delhi: Manohar Publishers, 91–106.

- 2008 “On the Authorship of the *Nyāyakalikā* Again.” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 56-3, 1063(27)–1071(35).

- 2014 『ジャヤンタ研究』, 東京 : 山喜房佛書林.

Potter, Karl H.

- 1977 *Encyclopedia of Indian Philosophies*. Vol. 2. Delhi: Motilal Banarsi Dass.

Raghavan, V.

- 1964 Introduction to *Āgamadambara Otherwise Called Śanmatanāṭaka of Jayanta Bhaṭṭa*. Darbhanga: Mithila Institute.

Steinkellner, Ernst

- 1961 “Die Literatur des älteren Nyāya.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 5:149–162.